

今日の授業

原発事故の教訓を生かす

たかむら・のぼる 長崎市出身。長崎大学院医学研究科修了。専門は被ばく医療学。長崎大教授、東日本大震災・原子力災害伝承館館長。56歳。

2011(平成23)年3月に発生した東京電力福島第1原発事故では、多くの高齢入院患者が長時間の避難に伴い、体調を悪化させて死亡しました。原発事故災害の関連死と言います。万が一、世界のどこかで再び原発事故があった場合、13年前の痛ましい経験を生かさなければなりません。福島国際研究教育機構(FIR E-I、エフレイ)は、どうすれば関連死のような犠牲者を減らすことができるのかを研究しています。委託研究実施者の高村昇さんに説明してもらいます。

たかむら のぼる
高村 昇先生



知恵 子ども サイエンス

放射線を浴び過ぎれば、がんになる危険性が高まります。このため、原発から放射性物質が漏れ出した場合、直ちに安全な場所に逃げる必要があります。ただ、入院中

悲劇繰り返さぬため

の人を急いで搬送しようとすれば、移動中に十分な医療を受けられない状況になります。安全に患者を運ぶための準備が整うまで、医療機関にとどまるのも選択肢と考えました。

第1原発事故の際、健康に影響のない範囲で何日間、病院内で過ごせたのかを計算しようとしています。当時の空間放射線量を調べ、医療機関

内の入院患者や医師、看護師らがどのぐらいの間まで、安全だったのかを割り出します。相双地方のある病院の近くに空間放射線量の計測器があったので、データを確認しました。しかし停電などの影響で、計測していない時間帯があったのです。そこで計測できていた一部のデータと放射性物質が半分になる期間を基に、推計しました。

相双地方のある病院の

この研究は産業への被害を抑えるのにもつながると思います。例えば、原発事故発生後、住民が避難したことで家畜を飼育できなくなり、殺処分されました。帰宅して餌を与えたり、世話をしたりできる安全な時間を明確にできれば、その時間内に作業をして家畜を守れるはずです。

放射能災害からの避難は、健康状態やその人が置かれた状況に合わせて柔軟に対処すべきです。これからも研究を進め、福島の教訓を世界に発信していきます。



原発事故を受け、入院患者が避難した医療機関